

「きのさき見て歩き」を開催しました

実施日 2025年6月6日(金) 9:20~12:00 (天気:晴)

講師 坂田 文一郎氏 (城崎文化協会会長)

内容 「城崎 文学碑めぐり」

【城崎駅：島崎藤村】



城崎振興局から城崎温泉駅まで歩き、島崎藤村の文学碑を見学して、講師の解説を聞きました。

島崎藤村の文学碑には、紀行文『山陰土産』の書き出しの文言が刻まれています。

島崎藤村は新聞社からの依頼で、大阪から島根県津和野までの紀行文『山陰土産』を執筆しており、その取材のため、北但大震災から2年後の1927年に、息子の鶏二と共に城崎を訪れました。

『山陰土産』には震災後の城崎の町の復興の様子が生々しく書かれています。

ここで中学生に『山陰土産』を朗読してもらいました。

北但大震災後の城崎の町の復興について講師から解説を聞きました。

震災後、県からは「建物の復興は火災に強いコンクリート造りが良い」との助言がありましたが、復興の際、城崎の人たちは何度も話し合いを持ち、和風を意識した木造の建物を建てることにしました。

防火面では、電力会社や特定郵便局、銀行の支店など公共性の高い建物を防火壁の役割を持つコンクリート造りにして、類焼を防ぐ工夫をしました。

【文芸館：志賀直哉】



文芸館で志賀直哉の文学碑を見学して、講師の解説を聞きました。

志賀直哉は東京で山手線に跳ね飛ばされ、重傷を負った後養生のために城崎温泉を訪れました。3週間の滞在中にハチ・イモリ・ネズミの死に出会い、自分と対比して命に対する考えを深めました。

城崎町は志賀直哉に文学碑の揮毫を依頼しましたが、なかなか良い返事は得られませんでした。

最終、自筆の「直哉」の文字が送られてきましたが、実際の文字には「哉」の字の「ノ」がありませんでした。志賀直哉曰く、タスキが書かれていないのは、書くとバランスが悪くなるから書かない、とのことでした。

ここで中学生に『城の埼にて』を朗読してもらいました。

【まんだら湯】

まんだら湯には、道智上人が一千日の間、「曼陀羅經」を唱え続けたところ温泉が湧き出たという言い伝えがあり、それが城崎温泉発見のいわれのひとつとされています。

【極楽寺：沢庵宗彭】



極楽寺で沢庵宗彭の歌碑を見学して、講師の解説を聞きました。

沢庵宗彭は、戦国の世に出石で生まれ、京都の大徳寺、東京の東海寺などで住持を任されました。

折にふれ出石の宗鏡寺に帰郷した沢庵宗彭は、出石から城崎まで舟を使って温泉に入りに来ていました。その際、城崎の極楽寺を宿にしていた。

極楽寺では、西垣前住職に極楽寺について話をいただいた後、この度、新たに数多くの麦わら細工が掲げられた位牌堂の天井を案内していただきました。

ここで、中学生に沢庵宗彭について朗読してもらいました。

【この湯】



この湯で、城崎の温泉について講師の解説を聞きました。

城崎温泉の外湯は、湯の湧き出ている所に建物を建て、湯船を作って温泉に入るようになりました。

震災後の復興時に温泉源を持つある旅館では、内湯を作る計画をしました。しかし城崎では、温泉は区民の共有財産であることや、泉源の乱掘は将来に禍根を残すことから旅館の内湯計画を反対しました。

その後、旅館の内湯の必要性を認め、湯島財産区は泉源の保護のため集中管理方式をとり、温泉の優先配湯を外湯と内湯配当契約旅館にすることとしました。

この湯の裏手にある大きなタンク2基は、この集中管理方式のための施設です。このタンクから7つの外湯と契約した旅館の内湯に配湯しています。

【地蔵湯：白鳥省吾】



地蔵湯で白鳥省吾の歌碑を見学して、講師の解説を聞きました。

津居山の漁師の妻たちは、セリにかけた魚をリヤカーに積み込み城崎温泉に売りに来ていました。冬場は松葉ガニが加わり、旅行客の土産物として好評でした。大谿川沿いにリヤカーが並ぶ風景は冬の風物詩になっていました。

歌碑には、カニを売る女性の姿がうたわれています。

ここで中学生に『蟹鍋の讃』を朗読してもらいました。

城崎庁舎へ戻り12時頃解散しました。